

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!  
 ★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!  
 ☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

## 史料ネット NEWS LETTER

第7号 1997年1月28日(火)

発行 歴史資料ネットワーク(神大文学部内)  
 TEL078-881-1212(内線4070), FAX803-0486

目次	
日本史研究会大会特設部会速報ほか……………	1
各種プロジェクトの状況……………	2
新聞記事から……………	4
西淀川企画のお知らせ(大阪歴史学会)……………	8

### 日本史研究会大会、特設部会速報

前号でお知らせしたとおり、1996年11月23日(土)、立命館大学での日本史研究会大会において約200名の参加により特設部会『阪神淡路大震災と歴史学—被災史料保全活動からみえたこと』を開催、藪田貫氏(関西大学文学部)と佐賀朝氏(大阪市立大学大学院)の司会により、史料ネットを中心とした被災史料保全活動に関する報告と討論を行ないました。会場ロビーでは史料ネットの活動を紹介する写真パネル展示も行ない、参加者の関心呼びました。

なお同日、日本史研究会総会決議として、被災地のさまざまな歴史的文化的文化財の保全と、震災そのものに関する資料の保存・公開を求める決議も採択されました。これについては、後日、文化庁、兵庫県、および被災各自治体に提出し、要請を行ないました。

また、当日会場で募金協力をお願いし、計12万6,573円の募金をいただきました。ほかに振込分などもあわせて、ニュース第5号で募金を呼びかけて以降の昨年7月~12月の募金総額は、182万9,313円となっています。全国からの厚いご支援に感謝申し上げます。ありがとうございました。

### 大会での議論を受けて、パート2を開催します ニュースへの投稿も募集

議論のなかでは、今回の活動の意義が強調されるとともに、なぜこういった取り組みが可能となったのか、その歴史のおよび社会的意義をあきらかにしていくことが、課題として浮かび上がってきました。一方で、時間的制約もあり、当日の議論は必ずしも十分なものではありませんでした。今後、活動を継続するとともに、その経験と教訓、到達点を議論し共有化する努力を続けていく必要があると、私たちは考えています。そこで、そのための取り組みの第一弾として、下記のような研究会を企画しました。多くの方のご参加をお願いします。

阪神・淡路大震災と歴史学 パート2 —日本史研究会大会特設部会での議論を受けて—

日時・場所 1997年2月16日(日)午後1時30分~5時 エルおおさか604号  
 地下鉄谷町線天満橋または京阪天満橋から西へ10分 TEL 06-942-0001  
 コメント 辻川 敦氏(尼崎市立地域研究史料館)ほか

また、大会での議論と上記パート2の報告をあわせて、News Letter 第8号で紹介します。大会当日の感想文なども、紙面の許す範囲で掲載する予定です。加えて、今回の活動に対する意見・感想を下記の要領で広く募り、同号に掲載したいと考えています。奮ってご投稿ください。

☆ News Letter 第8号への投稿 テーマ「被災史料保全活動に対する意見、感想など」★  
 ★ 400字5枚以内 1997年2月末締切 史料ネットセンター(本紙奥付参照)にお送りください ☆

### 史料ネット活動支援募金 (郵便振替)

名義 阪神大震災対策歴史学会連絡会 □座番号 01090-7-23009

## 各種プロジェクトの状況

**■埋蔵文化財問題** 前回ニュースでお知らせした第2回「被災地の遺跡を考える見学会」は、明石市の「明石城下武家屋敷跡」を対象に8名の参会者を得て昨年12月19日に行なわれました。今回は、震災前からの計画にもとづくJR明石駅前の再開発にともなう調査発掘でしたが、調査区域内には震災による倒壊家屋も数件ありました。再開発後は、マンションやショッピング施設等ができるそうです。

調査面積は12,000平方メートルと1町歩をこえる大きな規模を有し、そのため、武家屋敷跡一戸分の全体的発掘が可能となったのはきわめて希で貴重であるとのことでした。また、文献史料との関連では、現存最古の城下区画図（享保年間）とは異なった、それ以前の城下区画の存在を予想させる、街路かと思われる遺構がみられることも興味深く、この点については今後の精密・慎重な調査が待たれるところです。しかし、一方、このような現場の規模と意義に対して、調査期間は1年間（1997年9月まで）と短く、調査員の方々からは、日程的に相当な無理があるという意見が聞かれました。さらに、それは、すでに基本的合意はあるとはいえ、調査区域内の店舗や住居の立ち退きを進めながらのことであり、立ち退かれる方々の側にも、新たな生活への準備期間として立ち退きまでに今少しの日程的余裕を望む声があるとのことで、調査の日程的困難はいや増しとなっているようです。

このように、非常な困難がありながら、明石市としては、調査成果を通常の報告書としてまとめる方針であるとのことです。また、調査員の方々も、現場を囲むフェンスを金網にし、さらに、遺跡の説明パネルを特別に設置し、地域の文化財としての公開性を高める努力をなさっていたことが、印象的でした。（文責・井上勝博、6頁の新聞記事もあわせてご覧下さい）

**■石造文化財** 一街の石造物から歴史を探るウォーキング（第1回）レポート

神社の灯籠や瑞垣、道端の道標など街の石造物は、地域の歴史が刻まれた文化遺産であり、文献の空白を埋める歴史資料として近年、研究者も注目してる。被災地にも近世以来の石造物が数多くあったが、本格的な調査がなされないまま、地震で破損し、復興工事の本格化で解体・破棄も進行している。そこで市民参加形式の調査を行ない、修復・保存の方策を探るウォーキングを、神戸市灘・東灘区で企画した。

今冬最大級の寒波が日本を襲った12月1日（日）、寒風吹きすさむ午前10時、住吉駅前に16人が集まった。うち7人は新聞などを見てきた10代～70代の一般参加者。早速、最初の調査地、本住吉神社へ。神社の由緒と調査方法についてのレクチャーの後、5つの班に分かれて、銘文の記録などの調査を始めた。一般参加者の中には専門家の説明を聞くだけのつもりでやってきて、調査用紙を手に戸惑う人もいたが、アドバイスを受けながら慣れてくると、熱心に年号や人名を書き込む姿が見られた。1時間半ほどで調査を終え、集まって感想・疑問を出し合った。「なぜ素麺屋が多いのか」という質問に「かつては六甲山系の急流を利用した水車製粉が盛んだった」という説明がされると、参加者から「ほおー」という感嘆の声があがった。

午後からは西に歩きながら、網敷天満神社と徳井神社で石造物の被害状況などを視察。さらに西へ進んで六甲八幡神社で、再び手分けして記録調査を行なった。調査中、境内の隅に放置されていた花崗岩の「流し台」の基部に、近世初期の矢穴（切り出す時の鑿穴）が残っているのが見つかり「大阪城の石垣用の石の転用では？」など、議論に花が咲いた。午後4時、阪急六甲駅前で解散。年輩の参加者もいて寒さの影響が心配されたが、無事調査を終わることが出来た。

調査した石造物の中には専門家周知のものもあったが、今回の様に悉皆記録をとると、様々な情報が読みとれることが、改めて浮き彫りになった。またウォーキング中に通りかかった「南光寺地藏尊」祠前にある古ぼけた地藏の台座が、なんと室町時代（15世紀）の宝篋印塔の基礎であるという偶然の新発見もあった。体感気温は氷点下という中での調査であったが、大きな収穫があり、最後のミーティングでは第2弾の実施が決定された。（文責・藤田明良）

# 震災資料収集と記録編さん

21世紀ひょうご創造協会や、震災記録情報センターなどによる資料収集と保存の取り組みが続いています。次に紹介する神戸新聞の記事にある、育英高校の避難所資料については、史料ネットが21世紀ひょうご創造協会への仲介と調査に協力しましたので、ご紹介します。

1996年12月2日 神戸 (社会面(2))

(第3種郵便物認可)

## 避難所のビラ、ボランティア日誌…

# 失われる震災資料

震災の混乱の中で食料や住まいの確保に奔走した被災者、避難所の運営などにさまざまな形で交わったボランティア。そうした足跡を直接伝える膨大な記録や資料が、次第に失われつつある。大学や図書館、市民グループは、体系的な保存に向け、ネットワーク化などに取り組んでいるが、転居などが進むにつれ、捨て去られてしまうという。避難所の張り紙やビラ、ボランティア日誌…。整理の際には、提供をとりわけ掛けている。(小本 淳記者、4面に関連記事)

## 体験継承に不可欠

「これだけは手元にもあり、依頼のビラを配った時は反響がすごかった。避難所から仮設、市長田区の育英高校、記録 恒久住宅への転居に伴って収集を進める兵庫県の外郭 捨てられるケースも多く、団体「21世紀ひょうご創造 記録を保管する元避難所リ協会」の地域情報センター ターを模して3人も、人 職員に、学校側が避難所当 時の資料の数々を示した。 同校は震災当日から被災 者を受け入れ、ピーク時は 七百五十人余り達した。 その一人ひとりが記入し、 正面玄関に張り出されてい た五千冊のビラ。家族四人 の名前の下に「お兄ちゃんへお母ちゃんへ」と二美と二 緒にいます。かす」との メッセージが読める。

## 研究機関など 提供呼び掛け

校内内の消火器具の列を教職員が撮った写真は、震災直後の火災への恐怖を物語る。

同センターは、行政資料に取組む県立図書館郷土

を中心とした約一万点を保存、

避難所の記録などは約四千

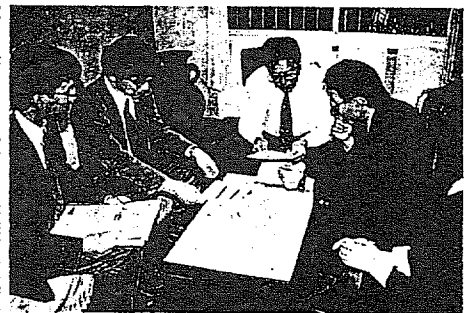
点を収集した。が、資料の

散逸や時間の経過で、状況

は厳しくなっている。

そのが役目、新しいも

仮設住宅千五百戸に協力

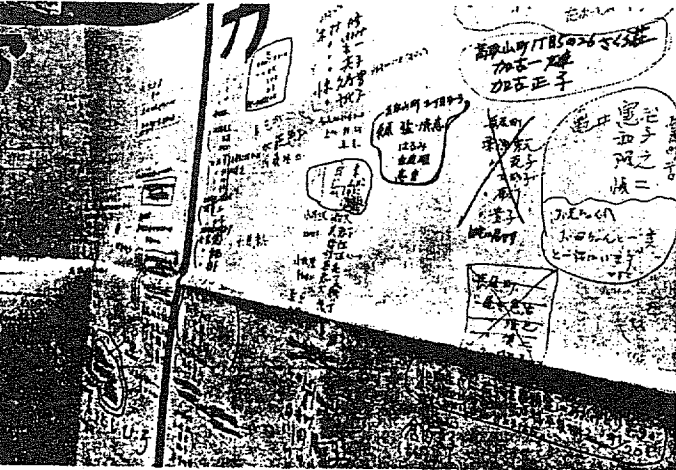


避難所当時の記録に見入る「創造協会」の職員と育英高校の教職員ら—神戸市長田区、私立育英高校

「震災は前後五十年、百年と検証していくべきテーマだ。多くの書籍や報告書が出されているが、書物にはどうしても主観が入る。将来、再検証しようにも原典に頼ることができない」「ひょうご創造協会」の北岡孝統さん(心も)「ビラやチラシの価値は私たちが判断すべきものではない。足跡をそのまま保存し、価値判断は後世の人に託すべき」と話す。

兵庫や大阪の図書館、史料館の職員有志は今、「震災記録を残すライブラリアン・ネットワーク」を組織、情報交換のほか、保存状況アンケートなどを実施している。

同ネットワークは市民グループの震災記録情報センター(神戸市東灘区)と連携し、震災記録情報交流



震災当日の午後、育英高校の正面に張り出された避難者名簿。逝去した人の名前が引かれている

## 復興 検証

# 歴史文化復興に向けて

- 1

震災直後、私は神戸市内約二百三十点の文化財について、被災状況を調査するため、学生を連れ一件ずつ訪ね歩いた。約八割が被災しているを知った。震災から一年を経て、再度の調査をした結果、打ち捨てられたままの文化財が、多数存在していることに気がついた。百年、二百年と伝えられてきた文化財が、ここで消滅してしまうという危機感を抱いている。

震災直後、同じように廃墟の街へ入り、銀行のロビーに十数点の名画を持ち込み展示して回った同僚がいた。一軒一軒民家を訪ね歩き、昔の村の文書や漆器など古い道具を救い出した者もいる。昭和初期の洋風建築を研究している友人は、神戸市の中心街で、この時期に建てられた多くの建築が取り壊され、どこかの地方都市にもあるビル街が出現すると嘆いている。いずれも被災した住民の視線で文化を考えた結果だった。彼らは昔、貴重な文化財が消

灯ろう、古文書、道具類、建造物…

## 無名の文化財を救おう



内田 俊秀

うちだ としひで  
一九四八年、神奈川県生まれ。明治大学文学部卒業後、イタリアの国立ローマ中央修復研究所などへ留学。著書に「兵庫鮫業史の研究」(共著)ほか。

### 対策ないまま消滅の危機



阪神大震災で壊滅的被害を受けた酒蔵地帯。現在は町のたすまいが一変している。神戸市東灘区御影塚町(一九九五年一月十七日撮影)

知恵を語る語り部でも、あんなに残念なことに、文化財の復旧には差が出はじめている。例えば、国や県などから修理費用を援助してもらった重要文化財など指定文化財は、東京や京都の工務で修理されているし、神戸市北野界隈に残る指定建築物は、専門家が来て修理作業を進めている。国が威信をかけて取り組んだことがうかがえる。

しかし圧倒的多数の文化財は、公的な補助が出ず、自力で復旧しなければならぬ。復旧できる余力を持つところはいくつか、しかしそのめどがたないところも少なくない。打ち捨てられたままになっている。多くの神社の灯ろうなどは、異型である。又、文化の基盤を形成し、身近ないわば無名の文化財が多数、何の手だても講じられないまま横たわっている。市民のグループや日本史研究者を中心に、保存の呼びかけが、講演会などを通じて続けられているが、それとて細々としたものであり、これら文化財を消滅から救うには、微力である。

二十世紀初頭以降、近代化を急速に推し進め、日本の伝統的な遺産を、存在意義や歴史的価値も十分吟味せず捨ててきた道のりには、よく見られることかも知れない。われわれの数回の討論で浮かび上がった神戸の文化の姿は、そこにびたりと重なるものだった。八百年前の兵庫の港から、東へ東へと中心を移してきた港湾都市の歴史を、自治体は、市民が維持し活用すべきものとして大切に残してきたか、疑問だ。このような姿勢が、背後の大きな流れを感じたものの実体である。

今われわれは、神戸の街と文化を復興するにあたり、歴史を断ち切り宙をさまよう街をつくるのか、もうでなく先人たちの試行錯誤の中で積み重ねられた習慣や歴史を受け継ぎ、それを具体的に表現する歴史的景観を持つ街をつくるのか瀬戸際に立っているところ

(京都造形芸術大助教授)

このシリーズは毎週日曜日に掲載。次回の執筆者は奥村弘神戸大助教授です。

抱えてしまうという危機感を抱いているが、同時に背後



# 歴史文化復興に向けて

— 3 —

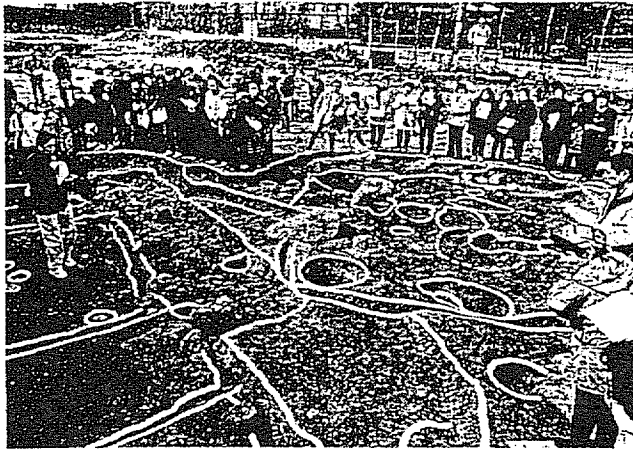
この十月の終わりに私がかかわる埋文関係救援連絡会議のメンバーとともに、震災後の復興・再開発に伴う遺跡調査を見学するため、芦屋と神戸の発掘調査現場をたずねた。また空閑地の目立つ芦屋市内では、数件の調査が同時進行していた。千葉や群馬などから派遣された職員が、共同住宅建設の事前調査にあっていた。神戸では大規模な調査が市内各所で実施され、被災地で遺跡調査が急ピッチで進められていることを実感した。調査の量は、神戸市では震災前の三倍十倍に及び自治体もあるという。

だが、震災直後の廃墟となった街を体感しただけが、今日の姿を予想しただけであらうか？

豊富な歴史遺産を抱える阪神間は、震災前にも開発に先立つ発掘調査が行われていた。わが国では文化財保護法によって開発行為で遺跡が損壊される場合には、発掘調査を行うことになっている。しかし、今回

## 埋蔵文化財調査に安堵と懸念

### 被災が増幅した行政の課題



発掘調査の説明会には、いつも多数の住民が集まる  
神戸市東灘区西岡本

て、この法律をどこまで従来通りに遵(じゅん)守できるか、また、調査体制をいかにすべきか、という難問に直面した。

## 歴史遺産に優しい目を

文化庁、兵庫県、関係市町で協議され、遺跡調査の迅速化のために三つの柱が立てられた。文化財保護法の運用を緩和し、調査を必要最小限にとどめること、

公的補助金を増額し開発者の調査費用負担を免除または軽減すること、全国から調査職員を派遣し調査体制を強化することであった。現在、芦屋から鹿儿島まで

約五十名の支援職員が被災地の調査にあっている。被災地で遺跡調査を行うことに対して、当初、地域の住民の方々からの否定的な反応を懸念していたが、むしろ、これまで以上に大きな関心が寄せられているようである。昨年の夏に最もひどい被災地の一つである長田地域で調査をしたとき、付近の住民が連日発

災地での遺跡調査が可能に降(ふ)り、現在では年間九千件を超している。遺跡は毎日「記録」され、そして「破壊」されてゆく。歴史遺産の喪失に加えて、調査成果を社会へ生かすことも時間の制約から十分とはいえない。急速に進む被災地の埋蔵文化財調査も、残念ながらこのような状況の下にある。



岡村勝行

おかむら・かつゆき  
1961年、大阪市生まれ。大阪大学文学部卒。88年から財団法人大阪市文化財協会調査員。論文に「スカラブレ」(「世界の遺跡」所収)など。

掘現場を訪れ、一種の井戸端会議の光景であったという。最近では、自治会など地元から現地説明会を要請される場合もあると聞いて、多くの人々が埋蔵文化財調査に対し、理解を示していることのおうわれである。

今回の震災は日本の埋蔵文化財行政がこれまで抱えてきた問題を集中かつ大規模に露呈させたこととなった。狭い国土に三十万以上の多くの遺跡が存在し、遺跡調査件数は高度成長期以来、ほぼ従来通りに被

発掘調査の説明会には、いつも多数の住民が集まる

兵庫県下の被災地に存在する遺跡は、二百七十八遺跡、面積二百五十三畝と広大である。多くの関係者の尽力で、ほぼ従来通りに被

跡調査件数は高度成長期以来、ほぼ従来通りに被

あの地震は実に大きな被害をもたらしたが、こういった逆境にあっても大地に刻み込まれた歴史の遺産を大切にしたい街づくりが行われることを願ってやまない。

このシリーズは毎週日曜日に掲載。次回の執筆者は藤田明良史料ネット事務局長です。

# 歴史文化復興に向けて

— 4 —

関東大震災では、図書館などの施設が罹り(災)し、多くの文献史料が滅失した。幸い今回の震災では、博物館や図書館の史料は書棚から落ちた程度で、ほとんど被害はなかった。しかし、施設に収蔵されている史料は、全体からみれば少数派である。江戸時代以降の古文書や記録の多くは、民間家屋のなかに所在しているのである。特に近年関心の高い、庶民のつながりや生活感覚といった身近な歴史の解明は、施設内史料だけでは不可能だ。

震災の被災地は過去、阪神大水害や空襲などで、多くの史料が失われた。かううじて残った貴重な史料が今回消えてしまえば、地域の歴史を未来に伝える手立てが、被災地から無くなってしまう。私たち歴史研究者が、歴史資料保全情報ネットワーク(史料ネット)を結成し、被災史料の救出を始めたのは、そういつ思いかつた。以後、自治体の担当職員や市民、さらに文化庁の文化財等救済委員会などと協力し、史料の

## 被災史料の保護が急務

### まず価値を理解してもらうことから

一方で多くの史料が、震災で消えてしまった事実も明らかになっている。阪神間は一九六〇—七〇年代、充実した自治体史が相次いで刊行され、この分野では先進地域といわれていた。だが自治体に残された所有者リストをもとに、被災地をまわったわれわれは、民間所在の史料の約半

数が、破壊・売却された事実には直面した。さらにショックだったのは、空を消した史料の二割以上が、代替わりや家の建て替えなどで、すでに震災前に処分されてしまったことだ。阪神間より遅れて自治体史を刊行した関東では、それを機に史料館や文書館が次々と設立された。だが阪

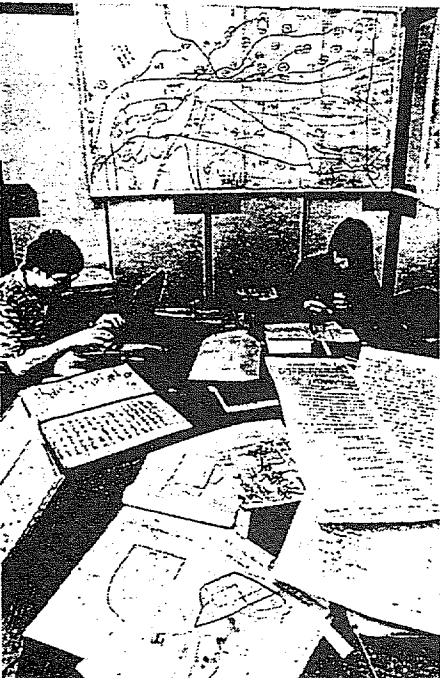
藤田 明良



ふじた・あきよし 新潟県出身。九三年神戸大学大学院博士課程修了。現在、大阪外大・神戸女学院大非常勤講師。専攻は中世対外交流史・漁業史。三十六歳。

## 救出文献など公開も始まる

「文化都市」というイメージが市民の手ですら、それが、私たち研究に広がっている。約七十名の会員で統一している。西宮市地区では、新史料の大量発見を機に、住民を中心にした歴史資料を守る会が生まれ、歴史会を成功させた。救出活動の初期から市民の参加があった。このような活動を通じて、その裾(すそ)野は著実に広がっている。



救出された古文書。整理も徐々に進んでいる。西宮市西町

研究者にも反省をうながして、史料の量や範囲もまた拡大する。今後とも増え続ける膨大な史料を、市民の理解・協力・創意なしに、研究者や行政だけでの力で、保全するのは不可能である。震災で得た貴重な教訓を糧に、被災地文化遺産を守り育てていけるのか。私たちの力が試されるべきである。

(史料ネット事務局長)

このシリーズは毎週日曜日に掲載。今回の執筆者は神戸史学会会員の眞野修氏。

## 「西淀川を考える一大都市近郊地域の歴史的変貌一」のお知らせ

大阪市西淀川地区では、1995年来公害訴訟に判決が下されるなど、近年ようやく地域の再生にむけての新しい動きが踏み出されようとしています。また、ここは同時に阪神・淡路大震災でも大きな被害をうけたところでもあります。そこで、同地区の街づくりと文化の再生にむけての課題を地域の住民の方々や皆様と一緒に考えるべく、来る3月16日、大阪歴史学会、公害地域再生センター（あおぞら財団）の主催により、「西淀川を考える一大都市近郊地域の歴史的変貌一」と題して見学検討会を実施することとなりました。内容は下記のとおりです。皆様お誘い合わせの上、どしどしご参加下さい。

### 〔記〕

日時 1997年3月16日（日）  
主催 大阪歴史学会、財団法人公害地域再生センター（あおぞら財団）  
後援 日本史研究会、大阪歴史科学協議会、京都民科歴史部会（歴史資料ネットワーク）  
内容

- 午前の部 見学会 9時30分 阪神西大阪線「福駅」に集合  
現地見学：福駅→住吉神社→大浦の渡し跡→大野川縁道→福漁港→合同製鉄所→大野→住吉神社→福駅
- 午後の部 検討会 13時30分 エルモ西淀川（西淀川区民会館、阪神西大阪線福駅北すぐ）  
報告①「村から町へー近世の西淀川地域一」（渡辺忠司氏ー大阪市史編纂所）  
②「明治期における淀川改修工事と西淀川地域」（服部敬氏ー花園大学）  
③「阪神工業地帯の形成と西淀川の変貌」（小田康徳氏ー大阪電気通信大学）  
④「公害患者の訴え」（西淀川公害患者と家族の会）  
⑤「西淀川公害裁判と歴史とのかかり」（津留崎直美氏ー弁護士、西淀川公害訴訟弁護団）

※資料代500円が必要です。

【お問い合わせ】大阪歴史学会事務局 〒543大阪市天王寺区南河堀町4-88  
大阪教育大学天王寺キャンパス木村寿研究室 TEL06-775-6630

なお、上記見学検討会に先立ち、書評会をを予定しております。あわせてご参加下さい。（お問い合わせは、尾崎耕司 〒558大阪市住吉区荻田6-7-27-306 TEL06-606-4613 まで）

（書評会）小山仁示氏著『西淀川公害 大気汚染の被害と歴史』（東方出版、1988年）

報告ー片岡法子氏（あおぞら財団）他

日時ー1997年2月14日（金）P.M.6:30～9:00 場所ー大阪教育大学天王寺キャンパス

◇史料ネットセンターに電子メールアドレスができました!!

yfujita@miyamizu.lit.kobe-u.ac.jp

◆このニュースレターの郵送購読の申込みを受け付けています。ご希望の方は、ネットセンターまでお問い合わせください。

史料ネット NEWS LETTER No. 7 1997. 1. 21 (火)  
編集・発行 歴史資料ネットワーク 〒657 神戸市灘区六甲台町1-1  
神戸大学文学部内 TEL. 078-881-1212(4070) FAX. 803-0486  
e-mail yfujita@miyamizu.lit.kobe-u.ac.jp